

そろりと申す大納言



そらごと申す大納言（試し読み）

夏の大井川での出来事である。橋の上を一台の牛車がゆっくりと進んでいた。それを下賤の者たちが、橋のたもとに群がって好奇の目で見送っている。

何故なら車の物見の窓から、一人の姫君が顔を出していたからである。李のようなうぶ毛が頬に生えた、まだあどけない年頃の姫君である。高貴の人であればまず滅多なことでは人前に顔を曝さない時代のことであるから、当然、供回りの者たちもその様子に眉をひそめている。しかし姫君のほうにはそれを気に止める様子もない。

姫君は夏の空気を胸一杯に吸い込みながら、大きく伸びをした。嵯峨野【さかの】の風は、都のそれに比べて少しばかり涼しい。日は頂点にあった。

「いけません、日に焼けます」

姫君の側に控えていた女童【めのわらわ】は、そう言って物見の窓を閉めようとするが、姫君はその白い手を掌で叩いた。女童は頬を膨らませて床の隅に座り込む。

姫君は構わず後簾【のちのすだれ】を上げると、車から身を乗り出した。

川辺には鮎を求める釣り人たちの姿が多くあった。岩場には白鷺が群れている。そのあいだを川風がゆっくりと通り過ぎた。水面はまるで白玉が跳ねるように輝いている。にわかにな網を激しく手繰った釣り人があった。水しぶきがあがるや、白い川辺に黒い鮎の体が跳ねた。

それを見た姫君が歓声をあげると、女童が乱暴に簾を下ろした。

「日に焼けたお顔で前大納言【さきのだいなごん】にお目にかかるわけにはまいりません」女童は憮然とした表情で言う、「祖父上に初めて会うのですよ」

しかし、姫君は再び扇で簾を差し上げた。嵯峨野の空は広い。小倉山のほうから雲の峰が湧いている。そこに、一羽の燕【つばくらめ】が、弧を描きながら、高く高く上がっていく。

「あの燕には親がいるのかしら？」

姫君は呟くようにそう言った。燕はどこまでも高く上っていく。

この頃、小倉山【おぐらやま】を背にした広大な敷地に、月舟院【げっしゅういん】と呼ばれる邸宅があった。前大納言【さきのだいなごん】大伴文行【おおとものふみゆき】が、余生を送るために造営した別邸である。

呉竹【くれたけ】の君と呼ばれるまだ幼い姫君が、父の住む土御門【つちみかど】の邸宅を出て、祖父の前大納言を頼ってこの月舟院にやってきたのは端午の節句も済んだ五月も半ばのことだった。

姫君が通されたのは日当たりの良い西の対である。月舟院の女房たちは几帳【きちょう】を立てて姫君が日に焼けないよう案じたが、結局、姫君は周囲の制止も聞かずに、前庭の見える濡縁【ぬれえん】のほうに駆け出していた。

澄んだ水を張った大きな池には舟が浮かび、それが池のほとりの夏草と一緒に、おだやかな風に合わせて左右に揺れていた。釣殿【つりどの】の足に絡んでいるのは朝顔の蔓で、大きな葉が覗

いている。庭を挟んだ向こう側の渡殿【わたどの】を、二人の雑仕女【ぞうしめ】が連れ立って歩いて行くのが見えた。

広大な屋敷である。西の対だけでも果てが見えない。

「おじいさまはどこにおわすの？」

姫君は控えていた女房に向かってそう尋ねようとしたが、途中で口をつぐんでしまった。池の端に、紅い鱗のようなものが何枚も浮いているのが見えたからである。よく目を凝らして見ればそれは丹塗りの杯のようだ。紅葉のように折り重なりながら、波に合わせて左右に揺れているのである。そのうちその杯の一枚が、仲間から離れて反対方向に向かって流れ始めた。

「杯が」

「いけません、姫」

姫君はすぐにこれを追いかけて、廊の突き当たりまで駆けていった。そこは、池の上にせり出すように作られた吹き放ちの釣殿である。

だが、釣殿に足を踏み入れた瞬間に姫君は両肩を強張らせて立ち止まった。釣殿には先客があった。水干【すいかん】姿の老いた下人が円座【わろうだ】の上に寝そべっているのである。彼は粘っこい笑みを浮かべてこちらを振り返った。白髪交じりの髭は伸び放題で、真っ暗な口の中からは黄色い歯が覗いている。姫君の頭から爪先までじっとりと視線をやると、老人は徐に、扇の先で流れていく杯を差した。

「また龍が生まれる」年寄り得意げにそう言う、「あの杯が長江の流れに落ちたとき、龍の鱗の一枚に変わるのだ」

姫君が首を傾げると、年寄りは両手を広げた。

「そうして長江で全身に紅い鱗をまとった龍は、天に昇りこの嵯峨まで飛んでくる。するとまた紅い杯がこの月舟院に雨のように降るのだよ」

姫君は恐る恐るこの年寄りの側に近寄った。そして釣殿から池の水面をのぞき込んでみる。先ほどの杯は、釣殿の真下の礎石に引っかかっていた。鯉がすぐそばを泳いでいく。

「この池は長江なんかに繋がっていないでしょう。そこの大井川の水を引いているのよ」

姫君がそう言うと、年寄りは黄色い歯を剥き出しにして強い口調で言った。

「何故そうだとわかる。お前は見たのか」年寄りの口からは酒の匂いがする、「予は入唐して確かに見た」

そのとき、ようやく女房たちが釣殿に辿り着いた。女房たちの中でも最も年嵩の月冴【つきさえ】と呼ばれる女房は、息を弾ませていたが、表情を固く引き絞ると、酒臭い老人に対して平伏し、平板な口調でこう言った。

「殿、こちらが羽衣【はごろも】の少将【しょうしょう】の御娘、呉竹の姫君でございます」

すると老人は風が通るような大きな笑い声をあげたのである。姫君は驚いた。

前大納言大伴文行は、姫君の顔を覗き込むと「よう来た、よう来た」と繰り返した。

これが呉竹の姫君が、自身の祖父と初めて顔を合わせたときの出来事である。